

第一朗読：ダニエルの預言(ダニエル12・1-3)；その時には、お前の民は救われる  
答唱詩編：(詩編16・5、8、9)；幸せな人神の恵みを受け、その喜びに生きる人。  
第二朗読：ヘブライ人への手紙(ヘブライ10・11-14、18)；キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさった  
アレヤ唱：(ルカ21・36)；目ざめていつも祈っていなさい、人の子の前にふさわしくたつことができるように。  
福音朗読：マルコによる福音(マルコ13・24-32)；人の子は、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める

カトリック学校では、他の公立学校あるいは私立学校と比べて違うところがあります。それは宗教という科目があることです。宗教と関係ない一般の学校では通常、道徳や倫理と呼ばれる科目に置き換わるものです。わたくし佐藤が神学生するとき、あるカトリック学校に行って宗教という科目について聞く機会がありました。先生のお話によると、宗教の授業の内容は道徳の授業の内容とは異なるとのことでした。道徳とは人間同士の関わりの中でどう人間らしく生きていくのかを教えるものですが、宗教では人間同士の関わりの上に神との関わりが加わり、その中でどう生きていくかを教えるものです。

人間関係がうまく行かないとか、誰とも関わるできないとかで、引きこもってしまうときに、道徳で教えていることだけでは行き詰まってしまうことがあります。それは人間同士の関わりの中で解決しようとするからです。人間関係で苦しむような状態になった人は、解決もできずに最終的に自分がいなくなればよいと考えてしまうことがあります。自死という手段を取り、この世からいなくなることで苦しみから逃れようとするのです。この世では自分を救ってくれる者、守ってくれる者がいないことに絶望するからです。

宗教の科目で教えていることは、人間同士だけでなく神との関係の中でもわたしたちは生きているのだということを教えています。人間同士の関係が難しい状態になっても、例えばクラスの中でいじめや無視があったとしても、神の愛は無くならないと知っていれば、あるいは神の恵みがつねに注がれているという感覚を持っていれば、そこに希望をもった上で現実を見つめ、一歩ずつ解決に向けて歩いていけるのではないかと思うのです。ですから、カトリック学校における宗教という科目は、人を導くために欠かすことができない科目でもあるのです。

今日の福音ではエルサレムの荘厳な神殿を見ながら終わりの日に何が起こるのかをイエスは弟子たちに語ります。イエスが語るの「苦難の後、人の子が大いなる力と栄光を帯びてやってきて、天使たちを遣わし選ばれた人々を呼び集める」ということです。つまり、救いの日は近づいているということを弟子たちに話します。人の子、イエス・キリストが再臨して人々を救うという希望を示しています。ですから、ここは、この苦難の時代は過ぎ去り、最終的に神のみ心によって希望が実現するというメッセージなのです。

一方で、今日の福音の最後には「その日、その時は誰も知らない。父である神だけが知っている」という言葉があります。その時がいつ来るのかだれも知らないのだから、今必要なことは皆が目覚めていなければならないということを言っています。これはいつも今の現実をよく見つめるようにという戒めのメッセージです。つまり将来のことばかり夢見てこうなればよいとかああなればよいとか議論するのではなく、現実を常に見つめていなさいということを弟子たちに語っています。

これは現代の私たちにも当てはまることだと思います。わたしたちもややもすればこの弟子たちのように現実を見つめようとせず、将来の救いばかりを期待する傾向がないでしょうか。自分の努力なしに神に何かをしてもらうことを期待することはないでしょうか。人々の目を現実からそらせ、将来に期待させることはいつの時代も支配者が望んできたことです。例えば、今苦しんでいる人や貧しい人、病気の人から目をそらし、将来の見えない危険に備えてお金を使ったりすることなどが思い浮かびます。明るい将来を描き、理想を大きく掲げ、現実の問題を見せないようにしてさらに多くを人々から搾取するということがいつの時代も行われてきました。苦しむのは支配される側の人々です。

これらのことから分かるように、実は終末思想という「将来の危険を示して今備えなければならないという脅し」が広がって喜ぶのは支配者なのです。したがってわたしたちはしっかりと現実をよく見て、今何をなすべきかということにもっと関心を払った上で将来の希望を見据えていかなければならないのです。終末の希望とは自分の死後のからだの復活によって神のもとでキリストとともに永遠の命にあずかることです。今月は死者の月ですが、いつか亡くなったすべての人とあいまみえることを期待しましょう。そのためにもこの世でのわたしたちの働きが神のみ旨にかなう、実りのあるものとなるように祈りましょう。